

2024年8月11日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

ゼカリヤ書 9 : 9

マタイによる福音書 21 : 1~11

「見よ、あなたの王」

【招詞】詩編 34 : 6~9

【讚美歌】 24 「たたえよ、主の民」

【詩編交読】詩編 6 編

【赦しの宣言】イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】 56 「主よ、いのちのパンをさき」

【祈祷】

【聖書】ゼカリヤ書 9 : 9、マタイによる福音書 21 : 1~11

【説教】「見よ、あなたの王」

<イエスさまの受難から十字架、復活まで>

皆さんと共に、この宮崎中部教会で主の日の礼拝をささげることが出来るのも、もう来月までとなってしまいました。残りの数回、どの聖書の御言葉を共に聞かせていただこうかと、ずいぶん悩みましたが、最後はずばり、イエスさまの福音そのもの。つまり、わたしたちの救いのために成し遂げられた、イエスさまの十字架から復活に至る出来事そのものを、改めて共に辿っていきたいと思いました。

聖書によれば、イエスさまは、エルサレムの町のゴルゴタという場所で、十字架に付けられたとあります。今日読まれた箇所は、そのゴルゴタの十字架へと向かっていくために、イエスさまがエルサレムの町に入られた場面。「エルサレム入城」と言われる、受難週の始まりの場面です。

そして、この場面には、わたしたちのために、神の御子イエスさまが、どのようなお方として来てくださったか。わたしたちにとって、イエスさまとは、どのようなお方か。そのことが、はっきりと示されているのです。

<神さまの約束>

さて、エルサレムという町は、イスラエルの王国の、かつての首都であり、神さまを礼拝する神殿が置かれた、神の民の中心地でした。

イエスさまの時代には、すでにイスラエルの王国はすべて滅ぼされていましたが、エルサレムには、神さまを礼拝するために再建された、立派な神殿があったのです。

ですから、神殿があるエルサレムの町は、国を失っても、なお神の民イスラエルとして歩いていくユダヤ人たちの、心の拠り所であり、宗教的な中心地でした。

今日の聖書の場面も、エルサレムの町には、過越祭に参加するために、各地から大勢のユダヤ人たちが集まって来ていた時でした。

そこに、ユダヤ人の一人としてお生まれになった、神の御子イエスさまも、弟子たちと共にエルサレムへ上って来られたのです。

しかし、イエスさまは、他のユダヤ人たちと同じように、神殿へ行く巡礼者の一人として、エルサレムの町に入られたのではありませんでした。

イエスさまはここで、特別な方法をとって、エルサレムの町に入られました。

それが、今日書かれていたように、子ろばに乗って、エルサレムへ入られる、という方法だったのです。

今日読まれた、旧約聖書のゼカリヤ書9：9には、次のような預言がありました。

「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。」

ここには、エルサレムの町に、神の民を救う王さまが、子ろばに乗って来る、ということが語られています。

これは、旧約聖書の時代から、イスラエルの神の民、つまり、ユダヤ人たちに与えられていた、神さまからの約束でした。

他にも、旧約聖書には、ダビデ王の子孫から、すべての民を救う、まことの王が現れる、という神さまの約束が、色々な預言者を通して語ってこられました。

ユダヤ人たちは、この、来るべき王こそ、滅びてしまったイスラエル王国を復興してくれる王に違いない。今、自分たちを支配している敵どもを蹴散らして、再びこの地に自分たち王国を建設してくれる、そのような王が、救い主として来られるに違いない。

そう信じ、その日が来ることを、待ち望んでいたのです。

そしてイエスさまは、エルサレムに入られる場面で、まさにご自分こそが、この預言で語られている、神さまが約束なさった、まことの王であることを、明らかにされたのです。

<王として>

マタイ 21：1～3 にはこうありました。「一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山沿いのベトファゲに来たとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、言われた。『向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばが見つからないであり、一緒に子ろばのいるのが見つかる。それをほどいて、わたしのところに引いて来なさい。もし、だれかが何か言ったら、「主がお入り用なのです」と言いなさい。すぐ渡してくれる。』」

そして、4～5 節にこう続くのです。「それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。『シオンの娘に告げよ。「見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、／柔和な方で、ろばに乗り、／荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』」

4～5 節に引用されているのは、先ほど読まれた旧約聖書の、ゼカリヤ書 9：9 の御言葉です。すべては、イエスさまが仰った通りになりました。そして、すべては、預言者が語った通りになったのです。

振り返れば、マタイによる福音書は、最初から一貫して、このイエスというお方こそ、神の子であり、約束のメシアであり、まことの王である、ということを証言しています。

マタイによる福音書のはじめは、イエスさまの系図から始まりますが、1：1 にはこうあります。「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。」

アブラハムとは、神に選ばれたイスラエルの民の父祖であり、ダビデとは、そのイスラエルが最も栄えたときの王さまです。神の御子イエスさまは、聖霊によって、ダビデ王の子孫であるヨセフの妻となるマリアに宿られることにて、ダビデ王の子孫として、この世にお生まれになったのです。

また、イエスさまがお生まれになった時、東の方から占星術の学者が、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」と尋ねてやってきます。

ここにも、イエスさまが、王としてこの世に来られたことが、証言されているのです。

そして、いよいよイエスさまが、すべての人の罪を贖うために、受難を受け、十字架に架かれるその直前。エルサレムに入られる時に。まさにこの方が、神さまが遣わされたまことの王である、ということが、いよいよ明らかにされたのです。

それが、イエスさまが、子ろばに乗って、エルサレムに入られたことの意味でした。

#### <群衆の態度>

マタイによる福音書では、言われた通りに子ろばを連れて来た弟子たちが、自分の服を上にかけて、イエスさまがそれにお乗りになった、とあります。

そして、エルサレムの町に来ていた大勢の群衆も、自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って、道に敷いた、とありました。

「自分の服を道に敷く」というのは、来るべき方を自分の王として迎えることを意味する行為です。そしてその後には、群衆の賛美の声が響きます。「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」

…つまりこの時、大勢の群衆は、イエスさまを、神さまが約束してくださった、ダビデの王座を継ぐ、来たるべき自分たちの「王」とであると、認めたのです。イエスさまを、神が遣わされた「救い主」として受け入れ、歓迎して出迎えた、ということなのです。

でも、わたしたちは、聖書を通して知っています。この後、これらの群衆は、手のひらを返して、今度はそろって、イエスさまのことを、「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫んだのです。なぜでしょうか。

それは、イエスさまが、彼らの思い描いていた、理想の王さまではなかったからです。

彼らが望んでいたのは、国を失ってしまった惨めさ、弱さから、自分たちを解放してくれる王さま。強い力で、敵国を蹴散らし、滅ぼし、自分たちの王国をこの地に立て直してくれる、そのような王さまです。自分たちの期待する「理想の王さま像」があったのです。

でも、イエスさまは、期待外れでした。自分たちの求めに応じてくれない。自分たちの望みを叶えてくれない。強くもないし、立派でもない。

そんな人物を、群衆はやがて、軽蔑し、罵るようになり、イエスさまを妬んでいたユダヤ人の指導者たちの扇動もあって、やがては「十字架で殺せ」と叫ぶようになったのです。

しかし、だからといって、わたしたちは、なんて愚かで、自分勝手な群衆なのだろうと、眉をひそめているわけではありません。

この群衆の姿は、まさに、神さまに対する、わたしたち人間の、罪の姿なのです。

わたしたちは、自分の思い通りに、神さまに救っていただきたい。願いを叶えていただきたい。神さまには自分の味方をしていただき、敵をやっつけていただきたい。そんな風に思っているところがあります。

わたしたちはどこかで、自分の思い通りの、理想の神さま像を造って、それを拝んでいるのです。しかしそれは、わたしたちが、自分自身を神としていることと、同じです。

本当は、神さまに造られ、命を与えられたわたしたちが、全面的に、神さまの御心に従うべきなのです。

それなのに、わたしたち一人一人が、それぞれ勝手な神となり、それぞれ自己中心的な王となり、まことの神さまに背き、逆らっています。ここに、人間の罪があります。

そしてこの罪によって、わたしたちはまことの神さまとの関係をぶち壊し、そのために、人間同士も互いにぶつかり合い、傷つけ合って、どうしようもなくなっているのです。

…イエスさまを、王として迎えた群衆も、神さまは、選ばれた自分たちの味方であり、自分たちの敵を倒すために、まことの王を遣わしてくださったのだ、と信じていました。

でも、神さまが実現しようとしておられた約束は、地上の彼らの小さな国を復興させることではなくて。彼らイスラエルの民を通して、御子イエスさまを遣わし、地上のすべての者を祝福することでした。そして、地上のすべての者たちが、神さまを愛し、また互いに愛し合うようになることでした。

それなのに、神の民であるはずの彼ら自身が、神さまの御心を忘れ、神さまの思いに背き、神さまに敵対する者となってしまったのです。

…さて、神さまに遣わされたイエスさまは、もちろん、ご自分に対する、群衆のそのような誤った期待も、身勝手な理想も、神さまに背いていることも、すべてをご存知であられました。

そして、やがて彼らが、勝手に失望し、ご自分から離れ、敵対し、十字架へと追いやっていくことも、ご存知だったに違いありません。

でも、イエスさまは、エルサレムに入られる時には、この群衆の、にわか服従を、一時の熱に浮かされた歓迎を、そのまま受け入れておられるのです。

イエスさまは、群衆が、イエスさまを王としてお迎えしたことを、ご自分がまことの王である証しとして、預言の実現の出来事として、そのまま用いてくださったのです。

それは、群衆が、裏切り、離れて行き、敵対してくる。それでも、イエスさまは、最後まで、彼らを救う、彼らのまことの王でいてくださる、ということです。

群衆がご自分に逆らっても、背いても、それでも、イエスさまは、最後まで、彼らの救い主でいてくださる、ということです。

イエスさまは、群衆が、そしてわたしたちが、従順だから、熱心だから、裏切らないから、わたしたちを救う王さまとなってくださるのではありません。

彼らの、わたしたちの、どうしようもない罪にも関わらず。不従順にも関わらず。愚かさにも関わらず。イエスさまは、神さまの御心のゆえに、愛のゆえに、憐れみのゆえに、喜んで、わたしたちの、まことの王となってくださるのです。

むしろそのような罪から、わたしたちを救うためにこそ、イエスさまは、わたしたちの王となってくださるのです。

#### <子ろばに乗った柔和な王>

しかも、この方のご支配は、武力で制圧し、強制的に配下に置き、権力で物も言わず従わせるような、地上の王の支配とは、まったく異なる方法でした。

神の御子イエスさまは、わたしたちの、どのような重荷も、すべて受け止めて、担ってくださる王となるために。どんなに罪深い者とも、どんなに弱い者とも、どんなに愚かな者とも、共にいてくださる王となるために。まことの人となって、どこまでも低く、どこまでも小さく、どこまでも弱く、どこまでも貧しくなられたのです。

それが、わたしたちを愛し、罪から救い、神さまの恵みによって支配するために来てくださった、わたしたちのまことの王、イエスさまです。

そして、イエスさまが「子ろば」に乗ってやって来られたことに、この方がどのような王であられるかが、最もよく現わされていたのでした。

本来、当時の、王さまの乗り物といえば、強い軍馬や、立派な戦車でした。

地上の王たる者は、圧倒的な武力で、各地での戦いに勝利し、多くの地域を支配下に治めます。そして、勝利の凱旋となれば、軍馬にまたがり、戦車を引き連れ、多くの兵士たちと共に、華々しく、威風堂々と行進をして、都へ入城してきたのでした。

しかし、イエスさまがお乗りになったのは、軍馬や戦車ではなく、子ろばでした。

他の福音書では、「まだだれも乗ったことのない子ろば（マタイ 11：2）」であったと言われています。そうであるなら、エルサレムに入る時、子ろばは、初めて成人男性を背中に乗せて、よたよた、のろのろ、とても覚束ない歩みだったに違いありません。

それは、王の凱旋、入城というには、あまりに滑稽で、不恰好で、情けない姿です。

でも、イエスさまは、弱い、小さな子ろばを選ばれた。戦うための強い馬や、戦車は、イエスさまには必要なかったからです。

今日読まれたゼカリヤ書 9:9 で、「見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って」と語られた後、10節にこう続きます。

「わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。」

ここでは、はっきり、神さまに遣わされる「まことの王」は、戦車と軍馬を絶つ方である。そして、戦いの弓は絶たれる、と言われていています。

預言されていた、来たるべき王は、「平和を告げる」王なのです。

そしてそれは、地上の王たちのように、武力によって勝利を収め、国々を制圧するような仕方で、平和をもたらす王ではありません。

9節に、「彼は、神に従い、勝利を与えられた者」とあったように。この来たるべき王は、神さまにどこまでも従順に従って歩むことによって、神さまから勝利を与えられ、平和を実現し、まことの王、まことの支配者となられるお方なのです。

イエスさまにとって、「神に従う」ということは、わたしたちの罪をすべて背負い、その罪の赦しを与えるために、十字架で死んでくださることでした。そのようにして、わたしたちを最後まで、愛し抜いてくださることでした。

そして、実際、そのようにわたしたちを愛し抜いてくださったイエスさまを、父なる神さまは十字架の死から復活させられ、勝利を与えられたのです。

そうして、イエスさまは、わたしたちを罪と死の支配から解放し、神さまの愛と、恵みと、命によってわたしたちを支配する、まことの王となってくださったのです。

だからイエスさまは、そのために、敵と戦うための軍馬ではなく、戦車ではなく。重い荷物を背負うために使われる、「ろば」にお乗りになるのです。

イエスさまは、武力で戦って、敵を蹴散らし、滅ぼして、王となられるのではなくて。むしろ、敵対する者をも赦し、受け入れ、愛することによって。そして、わたしたちが自分では抱えきれない重荷を、すべて代わりに担い、共に歩んでくださることによって、わたしたちの王となってくださるお方だからです。

それゆえに、この王は、高ぶることのないお方である、と言われます。高ぶることのない、というのは、マタイの引用の方にあったように、「柔和」とも訳されます。

高ぶらない、へりくだられた、柔和な王。平和の王です。「子ろば」は、まさにイエスさまが、そのような王であられることの、「しるし」なのです。

### <ご自分を与える王>

…わたしたちの王、イエスさまは、このようなお方です。

わたしたちは、自分の上に、王をいただくこと、支配されること、命令に従わされることを。自由を奪われること、束縛されること、自分らしさを失うことのように、考えるかも知れません。

でも、わたしたちの王なるイエスさまは、わたしたちのために、ご自分を与え尽くされるお方であり、十字架に架かることを選んでくださるお方であり、わたしたちの、もっとも下へとへりくだられて、底の底、下の下から、わたしたちを支え、包み、救いあげてくださるお方なのです。

わたしたちを、愛し尽くすことで、わたしたちを支配してくださるお方なのです。

この方のご支配のもとでこそ、わたしたちは、神さまの愛と赦しを受けて、もっとも自由に、もっとも自分らしく、神さまを愛し、また隣人を自分のように愛して、まことの平和を歩んで行くことが出来るのです。

聖書は告げます。「見よ、あなたの王が来る」。そうです。あなたの王。あなたの主。

子ろばに乗って来られ、貧しい、小さい者たち、罪人たちと共にあり、わたしたちの重荷をすべて引き受け、背負い、十字架へと進んでくださったイエスさまこそ、わたしのまことの王、わたしのまことの主なのです。

この方の許にこそ、わたしたちの救いが、罪の赦しが、永遠の命が、あるのです。神さまと共に生きる道が、愛に生きる道が、まことの自由と平和に生きる道が、あるのです。

わたしたちは、へりくだられた、この柔和な王を、平和の王を。心から、わたしの王として受け入れ、従っていきたいのです。

【お祈り】 天の父なる神さま、御名をほめたたえます。

あなたの御子イエスさまを、わたしたちの救い主として、わたしたちのまことの王として、お遣わし下さったことを感謝いたします。

しかも、わたしたちは、罪のために滅びに至る者だったにも関わらず、このまことの王が、わたしたちを愛して下さり、わたしたちよりも低くへりくだり、わたしたちの罪を背負い、わたしたちの審きを受け、わたしたちの死を引き受けてくださることで、罪の支配から救い出し、神さまと共に生きる愛と平和のご支配へと招いてくださいました。

わたしたちは、ただひたすら、感謝と喜びをもって、ただこのイエスさまだけを、わたしの王としてあがめ、終わりの日まで、従っていくことが出来ますように。

このお祈りを、救い主イエスさまの御名によってお祈りいたします。

【讚美歌】 309 「あがないの主に」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】 【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】 【祈禱】 【讚美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン